オデュッセウスとその妻

内田次信

アレクサンドリアの学者アリストパネスとアリスタルコスは，『オデュッセイア』の主テーマを，主人公夫妻の再結合と見做していたようである．ペネロペが見知らぬ男を夫と認め，再会を喜んで彼と抱擁を交わした後，寝室付きの女中がたいまつを手に ― 結婚の儀式を連想させる ― 両人を寝所に案内し，

二人は心楽しく，昔ながらの寝台が据えられている場所に歩み寄った[1]．
(23巻296行)

この個所を彼らは『オデュッセイア』の「終末」としている，と古注釈で伝えられている．テキスト上は話はまだ続くので，これは作品の主題がここで決着を見るという趣旨の評言であろう．

『エペソス物語』などの古代ロマンス[2]の作品の数々は，恋愛，放浪，冒険，誘惑等の要素において，『オデュッセイア』を思わせる特徴を示す．古代ロマンスの起源については諸説があるが，この極めて有名な叙事詩が多かれ少なかれその発生・発展に影響を及ぼした可能性は少なくない．ロマンスの作者たちも，『オデュッセイア』を恋愛物語として扱った（そして一つの模範とした）と思われる．

本叙事詩は，英雄の帰国にまつわる様々な側面を描こうとしていることは確かであるが，根本は夫妻の愛情に関する作品であるという捉え方は半ばは正しいと筆者は考える．このテーマの重要性は，全体の構成によって明らかである．またそれは全編にわたって取りあげられ，それらの個所相互間の関連を通じて聴衆の注意が喚起されるようになっている．

しかしこの作品は，古代ロマンスが概してそうであるような，ナイーヴに「ロマンティック」な男女愛の賛美ではない．聴衆は，アイロニカルな物語展開を通じて，男女関係一般の「現実」に思いを致すことになるだろう．むしろこれこそ作者の意図したところであったように思われる．

長期間の不在ののち帰郷を果たして家族なかんずく妻と再会し，かつての地位を回復するというパターンの，世界に広く見いだされる帰国者の物語が，本作品の基礎として利用されていることは疑いない．それは民話の常として，語

り口も素朴で，話の趣も総じてナイーヴな性格を示していたであろう．この，夫婦の長年の別離の後の再会という「純愛」的要素を含む物語は，『オデュッセイア』の聴衆にもよく知られていたと推察される．

ホメロスの作品では，男たちが遠い故郷に残された妻を偲ぶ表現がしばしば見いだされる．たとえば『イリアス』においてアガメムノンは，兵士たちに帰国を提案する際に，国で妻や幼い子たちが自分たちを待っていると述べる．

> 妻や幼な子たちは，わが家でわれらの帰国を待ち侘びているであろうに，われらが軍を進めたその当の目的はこの通り果たされぬままじゃ．
> (途中略)船に乗って故国へ引き上げよう．　(Ⅱ巻136行以下)

「待ち侘びている」が女性形ποτιδέγμεναιになっているから，妻の方に重点がおかれている．アガメムノンは，兵士の士気を試そうとして偽ってこう提案しているのであるが，彼の演説の最後の方で妻に触れるこういう言葉を聞いた彼らは，将軍の本来の意図に反して，歓声を上げながら一斉に船に向かって突進してゆく．これは戦士たちの，故国の妻への切実な思いをヴィジュアルに表現した場面である．国に帰れば自分の妻たちが暖かく迎えてくれるという，殺伐な戦いを続ける男たちの信じ込みを，アガメムノンも皮肉なことに共有している．

『オデュッセイア』においては，冒頭から主人公の妻への思いが強調される．

> 己が命を守り，僚友の帰国を念じつつ云々．　(1巻5行)

という主人公の放浪に関する文章で，「命」は「帰国」と実質的に同じことを表すから，この文は「自分の，および部下たちの帰国を達成しようとして」という意味である．主人公があらゆる苦難に耐えようとするのは，この為である．ところで「帰国 νόστος」という単語は直後に繰り返される．

> (オデュッセウスは)帰郷を願い，妻を恋いつつも云々．　(1巻13行)

この表現により，オデュッセウスの帰国への切望における妻の重要性が明らかにされる．

今オデュッセウスはカリュプソに引き留められているのであるが，ニンフが

そうしているのは，彼を夫にしたいと思っているからである．

(カリュプソは)彼を夫にと望む．　(1巻15行)

その直後に導入されるオリュンポスの場面では，「アガメムノンの正妻を娶り，帰国した夫を亡き者にした」(1巻36行)アイギストスの事件が人間への戒めとして語られた後，大神とアテーネーはオデュッセウスをカリュプソの許から帰国させることを決め，行動を起こす．アイギストスは，アテーネーも言及する（91行以下)求婚者たちに対応することは確かであるが，同時に

いかにも彼の男は当然の報いを受けて身を滅ぼしました．かかる悪事を働く者は，何人であれ彼同様に滅びて欲しいもの，しかし，かの聡明なオデュッセウスの身を思うと，私は胸の千切れる思いがいたします　(1巻46行以下)

という対比的表現によっても明らかにされるように，正しい夫婦関係という点に関して，カリュプソの誘いを却けながら，「妻を恋いつつ」帰国を切望する主人公の対照例になっている．ゼウスらがオデュッセウスを援助しようとする理由として挙げられる「犠牲を多く供えた」(60行以下など)行為，すなわち彼の信心深さということと，彼のこの正妻への切実な思いとは関連し合っている．５巻においてより詳しく描写される，美しいニンフの島での主人公の態度の要約的表現と，それを嘉し陰から助けようとする形で作品の展開を方向づけることとなる神々の意志決定の場面とを通じて，本叙事詩の冒頭部はこのように，正しい夫婦であること，あるいは夫婦の愛情ということが以下の中心テーマであることを示している．

しかし作者は，そのまま主人公のことを詳しく語ることはせずに，イタカに聴衆を導く．『テレマコス物語』とも呼ばれる最初の４巻が，精神的成長を遂げようとする息子の姿を描こうとしていることは確かであるが，同時に，今触れた作品冒頭部での主題提示を通じて，イタカに残されている妻のあり様について引き起こされた聴衆の関心にも応えることになる．

主人公の留守宅におけるペネロペは，ギリシア人の帰国譚を歌うペミオスの話を耳にして，夫のことを思い出して悲しくなるから他の歌を歌ってほしいと彼に頼んだり(1巻340行以下)，寝室で恋しい夫のことを偲びながら泣き濡れる妻で

ある(1巻363行)．また，息子から意見をされても何も言い返さず，そのまま引き下がってしまう女性である(1巻360行以下)．

貞淑でしおらしく，また控え目な様子を強調されるペネロペを聴衆は，ヘレネと比較するであろう（後にペネロペ自身が，自分の行動の説明にヘレネを引き合いに出す，23巻218行以下)．父の消息を尋ねに国を出たテレマコスは，ネストルの子とともに，スパルタにも立ち寄る．彼らの接待においては，再三ヘレネのほうが夫よりもイニシアティヴを取る(4巻138行以下，239行以下はメネラオスの言葉214行以下に反するようである，15巻171行以下)．それは彼女の才気煥発の現れでもあるが，同時に彼女の積極的性格にも基づく．貞節の点に関しては，言い訳するのは困難な立場にあるはずの彼女だが，それでもあまり悪びれる素振りを見せず，オデュッセウスの人物評の機会を借りて，むしろ自慢げにさえ聞こえる口振りで，トロヤに居た時の自分の言動や心持ちを皆の前で披露する．それは自己弁護の気味を帯びている．

> あの方はわれとわが身に鞭を加えて無残に傷つけ，肩には襤褸をまとってさながら奴隷のごとき風体で道広き敵の都城に潜入なさったのです．(途中略)皆他愛なくだまされて，それに気付いた者はおりません．私だけがその正体を見破って，いろいろ質問してみても，彼は巧みにはぐらかしてしまわれます．私が(途中略)，無事船の陣屋に帰りつかれるまでは，オデュッセウスの正体をトロイエ人らに明かしはせぬと堅く誓った時，ようやくアカイア勢の謀らみをすっかり話して下さいました．それから長剣をふるってトロイエ人多数を薙ぎ倒し，アルゴス軍の陣営へ帰還なされ，豊富な情報を持ち帰られたわけでした．私以外のトロイエの女たちは声をあげて泣き悲しんでいましたが，私はほのぼのとした想いでした．すでに私の気持ちは帰国に傾いていましたし，またアプロディテのせいで起こった私の心の迷い(途中略)が悔しくてならなかったのです．　(4巻244行以下)

聴衆は，ヘレネという女性の人格に対する不信感 ― あえてこういう表現を使うが ― を，その直後のメネラオスの話によってかき立てられるだろう．彼は，ギリシア人たちが木馬の中に潜んでいたときのエピソードを物語る．「トロイエ方に手柄を樹てさせたいと思われた神霊」にそそのかされたのか(4巻274行以下)，ヘレネがその時の夫デイポボスを従えて現れ，彼らが「潜伏する木馬の

腹に手を触れつつ，三たびその周囲を廻り，あらゆるアルゴス人らの妻女の声を真似て」彼らの名を呼んだ(277行以下)．メネラオスを始め他のギリシア人がそれにたぶらかされて，飛び出たり応答しようとしたのをオデュッセウスが抑止したおかげで，事は露われずにすんだという．時間的に先の事柄に関わる回想談における「すでに帰国に心が傾き，トロヤに来たことを後悔していた」というヘレネの自己描写に反するメネラオスのこの皮肉な証言は，彼女の心の不可解な移ろいやすさを浮き彫りにする．彼女は罪を神に帰し，夫も皮肉に（あるいは甘い態度から？）彼女の論法を受けているが，人命を奪ったり脅かしたりする罪に関して，そのような理由を情状酌量されるとしてもせいぜい一度までであろう．ヘレネ「男殺し」(ｱｲｽｷｭﾛｽ『ｱｶﾞﾒﾑﾉﾝ』689行)のむら気は，夫をじっと待つペネロペの忍耐に富む貞節と対照的である．

話は５巻でいよいよ主人公のことに移る．泣き濡れる妻と呼応するように，オデュッセウスも故国と彼女のことを思いながら，渚に座って泣き暮らしている(5巻151行以下)．確かに彼は，夜になれば，ニンフの洞窟で「自らは望まぬながら，せがむ仙女に止むなく添寝していたが」(5巻154行以下)，それは女神からの危害を避け，その助力を仰ぐために仕方のなかったことであり(10巻297行以下参照)，昼間は「涙を落としつつ不毛の海を眺める毎日であった」(5巻158行)のである．

ゼウス及びヘルメスの命を受けてカリュプソは，彼を解放する決心をする．別れを惜しむニンフと彼が言葉を交わす場面で，不死の命が約束されるにも拘わらず，また女神が自ら誇る，人間どもには及ぶべくもない美しさを彼も認めるにも拘わらず，オデュッセウスは妻のほうを選ぶ．

> (ｶﾘｭﾌﾟｿ)では御機嫌よう．そなたがもし，国に帰り着くまでに，どれほどの苦労を重ねねばならぬ運命であるかを知っていたら，そなたがいつも恋い焦がれていた妻に会いたい気持ちがいかに強かろうとも，きっとこの地に止まって，私とともにこの屋敷を守り，不死の身にもなっていたろうに．私は姿形でそなたの妻に劣るとは決して思わぬ，そもそも人間の女子が容姿で女神と争うなどということはあってならぬことなのです．(5巻205行以下)

> (ｵﾃﾞｭｯｾｳｽ)思慮深いペネロペイアといえども，相対して見れば，その体格も容貌もあなたに劣ることは，私自身よく承知しています．妻は人間の身，あなたは不老不死の神でいらっしゃる故，当然のことですが，

しかしそれでも私はこれまでずっと，国へ帰って嬉しい帰郷の日を迎えたいと願ってきたのです.たとえ(途中略)いずれかの神によって難破させられようと,艱難に負けぬ不動の心をもって,じっと耐えるつもり.

(5巻215行以下)

ニンフからの永遠の生の贈り物を辞してまで，そして海洋上で待ち受ける命の危険を冒してまで，妻の許に帰ろうと希求するのは，ペネロペが彼にとって存在意義そのもの，彼のｖｉｔａに他ならないからである.

筏を作り上げたオデュッセウスは,カリュプソの送る順風を背に受けながら,故郷に向かって出発する．先に引用した『イリアス』第II巻の場面では彼は，帰国を急ごうとする兵士たちを食い止める役割を果たしたが,今は彼自身が,妻との再会の期待に胸をときめかしながら海上に出てゆく.

オデュッセウスは順風に心楽しく帆を拡げた.　(5巻269行)

しかしオデュッセウスは，カリュプソの島から筏に乗って直接故国に帰り着くわけではなく，パイエケスの許での逗留を経て彼らの船に送り届けてもらうことになる．これは偶然の成り行きではなく，初めからそのように定められていたようである(5巻288行以下)．この一点からだけでも，この段の作品全体の構想上の重要性が察せられる.スケリア島での物語の意義はいろいろ考えられるが,その中でも特にナウシカアとの出会い，及びオデュッセウス自身による彼の漂流談に注目すべきであろう.

ナウシカアのエピソードの役割の一つは，カリュプソの話の場合に認められたものと同様の性質を持つ.彼女は美しさにおいても(6巻107行以下など),見知らぬ且つ恐ろしい外見の男を前に見せた気高い気丈さにおいても(同139行以下),あるいは心の優しさにおいても(同206行以下)，真に王女の名にふさわしい．一方,その男オデュッセウスも，汚れを洗い落とすと，魅力的な美丈夫の姿を現す(同224行以下).聴衆はこの美男美女の取り合わせから，彼らのよく知る(12巻70行)アルゴ船物語にも見いだされ，一般に民話として広く流布している，異国からの英雄と土地の姫の恋愛談を思い浮かべるであろう．ナウシカア，そして彼女の父王が，彼を花婿として夢想ないし願望する(6巻244行以下,7巻311行以下)ということが,この連想の正しさを裏づける．ところが，この花婿あるいは恋人候補たるオデュッセウスが，美しい乙女に対してその種の関心を全く示さず，ただ帰国を求め続ける

という展開を通じて聴衆は，彼の妻への想いのひたむきさを作者が強調しようとしていることを改めて確認する．

その第二の役割は，主人公の女性への対応の仕方の，壷を心得た巧みさを描写することにある．見知らぬ土地に漂流して困窮している自分に対する援助をナウシカアから得るため，彼はまず彼女に対して取るべき接し方をすばやく判断し ― 膝に縋ると乙女に嫌悪感を与えるかもしれぬから，離れた位置から言葉をかける ― ，次いで，結婚の適齢期にある彼女の第一の関心事を鋭敏に看取して，彼女の美しさ，すなわち花嫁としての魅力を誉め上げ，また彼女を誇りとし愛でてくれる裕福な夫が見つかるであろうことをほのめかして彼女の好意を確かにしてから，初めて自分の願い事を口にする(6巻141行以下)．女性の心理を読み取ったうえでの巧みな振る舞い方は，ナウシカアの母アレテに対しても発揮される[3]．ナウシカア，あるいはその他のスケリア島でのエピソードは一般に，イタカにおける主人公の行動や活躍の予示・準備という性格を持つ[4]．彼はわが妻に対しても，たとえ２０年ぶりの再会であっても，当然適切な対応をして，彼女との和合を容易に果たすであろう．

漂流談の中からは，キルケのエピソードにまず注目することにしよう．彼女の島に着いてから，初めに斥候に出された部下たちは，機を織りながら美しい声で歌う彼女に興味を引かれて一も二もなく(10巻228行)案内を乞い，屋敷に入り込む．そして，薬を混ぜて出された飲み物を何も疑わず飲み干したすえに，あっけなく豚に変えられてしまう(同220行以下)．しかし部下の救済に向かったオデュッセウスは，途上で出合ったヘルメスからもらった毒消し薬のおかげで，キルケの差し出す飲み物を飲んでも人間のままでいる．そして剣を抜いて切りかかろうとすると，彼女は恐れおののいて彼の膝にすがりつき，「二人で私の寝台に上がり，愛の契りを交わして互いに心を許し合おうではないか」(同333行以下)と誘いかける．彼は，今後悪巧みは働かぬと堅い誓いをさせてから，やっとそれに応じる（誓約をまず取るという対応の仕方は，扱いにくい女性ヘレネに対しても用いられた，4巻253行)．これらすべては，ヘルメスの助言通りにしているのであるが，いずれにしても，恐ろしい術を知る女性を陵駕した男性が，相手からその後は身も心も尽くされるという話になっている．オデュッセウスらが帰国しようとするとき，経路について細々とした忠告を授けるのも，女性の濃やかな気遣いの心に由ると言える．キルケの島での滞在は，彼女の情深い献身と信頼できる知恵との故に，さらに豊かに備えられた歓楽のゆえに(10巻427行など参照)，(能力ある)男性にとっての一理想郷の観を呈している．ただし，そういう場所

をも去って故郷へ帰ろうとするという点は，この場合は強調されない．むしろ主人公は，ここでつい一年も費やしてから，部下に諭されてやっと帰国のことを思い出すのである(同467行以下)．このエピソードにおいて主人公は，女性を支配する男性としての側面を強く示す．

漂流譚においてはさらに，主人公にとって最も関心の深い事柄である帰国ないし故郷について，三体の亡霊が忠告・警告を与えたり，様子を語ってきかせたりする冥界訪問の段が重要である．

ヘリオスの牛について警告したり，求婚者への復讐やポセイドンとの和解，あるいはオデュッセウスの死に関して予言するテイレシアスは，主人公の運命の成り行きについて大まかな見通しを授け，彼の生涯の大枠に関して予言を行いながら彼に指針を与える．しかしペネロペに関しては，復讐への言及との関連で，求婚者たちが彼女に言い寄っていると事実を述べるだけで，彼女の心中にまで立ち入って説明することはしない(11巻100行以下)．

もう一人の亡霊アンティクレイアの話では，テイレシアスの予言には総じて欠けていた情緒的・心理的色付けが加えられている．主人公の母は，家族全員が彼を待ち侘びていること — 彼女自身の場合は待ち侘びていたこと — を切切とした言葉で語る．その中にはペネロペも含まれる．妻はもう他の男に嫁いだのかというオデュッセウスの問いに対し母アンティクレイアは，彼の妻は堅固な心で館に留まっている，いつも泣き暮らしていると答える(11巻181行以下)．これは，「純愛物語」的傾向に合致した妻の行動・心理の描写である．

最後にアガメムノンである．彼を冥界で目にして驚いた主人公が，命を落としたのは航海中に嵐にあった為なのか，敵軍の手に掛かったのかと尋ねると彼は，間男と組んだ自分の妻に殺されたと答える(11巻409行以下)．問いの中に想定されていなかったように，これはオデュッセウスにとって驚天動地な勇士の死に方であるが，死者自身にとっても思いもかけない運命であった．

彼は，「子供や召使たちに喜んで迎えられるだろう」と思っていたと主人公に語る．この表現そのものには妻は含められていないが，直前で「連れ添う夫を殺すとは」と非難しながら彼女に言及している(11巻430行以下)．彼は謀殺されるまでは，上で引用した『イリアス』II巻における演説からも伺われたように，妻を含めた家族全員が，夫であり父であり主人である自分を待ち望んでいるはずと信じていたのである．

そして彼は，オデュッセウスも妻に対して決して気を許してはいけないと忠告する．たしかに，ペネロペは賢女であるから夫を殺すような真似だけはすま

い，即ち最悪のケースは免れるだろうと一種の保証はするが，ともかくこれは，薔薇色の希望に水をさすような警告である(11巻441行以下)．

アンティクレイアの話とアガメムノンの警告は，いわゆるインテルメッツォをはさんで相対した位置におかれている．そして内容的にも，今見たように，妻に対して取るべき態度に関し，ほぼ正反対の精神的影響を主人公に与え得るものになっている．そして一方は，その影を主人公が三度までかき抱こうとする愛する肉親であり，しかも妻とは比較的最近まで一緒に暮らしていた人物である．他方は，オデュッセウスと長年にわたって危険と苦難を共にした戦友であり，また帰国時の実体験を基に，似た状況下で帰国しようとする主人公にアドヴァイスする資格を十分に持っている．オデュッセウスは，どちらの言うことにより重きを置いたであろうか？

カリュプソの許での滞在を描く作品冒頭部および５巻の初めは，時間的には１１巻の冥界訪問譚より後の出来事を内容とする．そこでは，上で言及したように，オギュギエ島の浜辺で，彼が妻を思って身を焦がしている様子が描かれた．してみると彼は，アガメムノンの警告によって自分の妻への愛情に水を差されることはなかったようである．ペネロペと呼応するように彼の相手への愛も，一点の疑問も入る余地を許さない，揺るぎないものであったように思われる．

このように作品前半部分では，主人公夫妻の相呼応する恋慕心が浮き彫りにされる．故国へ向かう途次の主人公の回りには，様々な民話ないしメルヘンに基づくエピソードが集合され，全体として冒険や情事に富んだロマンス的趣を示している．それらのエピソードを通じて，妻に寄せる主人公の変わらぬ思いが強調される一方，故郷における妻も，いつ帰るともしれない夫を苦境に耐えつつじっと待つ貞節な女性として表される．これら帰国の前段階の提示の仕方は，原帰国者物語の「純愛」的雰囲気に対応すると聴衆は受け取ったであろう．もちろん元の民話でも，夫妻の間の認知および愛情の最確認に至るまでには，ある程度の紆余曲折はあったかもしれない．しかし相互に寄せる「純愛」は，ゆるぎない基盤として最終的幸福を保証していたはずである．また長期間の苦境に耐えてきた妻の心は，多かれ少なかれもつれて頑なになっているかもしれない．しかし主人公は女性心理を読むことに長け，女性に適切に対応する術を知っていることもまた，これらのエピソードによって示された．作品後半部では，原帰国者物語におけるごとく，夫婦の互いの愛情の最確認と敵への復讐とは密接に関連しつつ，幸福な大団円へと聴衆を導くことであろう．

さてオデュッセウスは，カリュプソの島から出発した時と同様に，楽しい期待に胸を膨らませながら(13巻30行以下参照)，スケリア島から故郷に向かう．

船上で心安らかに眠り込んだオデュッセウスを，イタカ島で財宝とともに船から降ろすと，パイエケス人たちは沖へ去る．目覚めた彼は，辺りが霧に覆われているので，自分が故郷にいるとは気付かない．そこへ若い羊飼いに変身したアテーネーが現れ，彼に真実を明かすことになる．

とうとう故郷に帰ったと知ったオデュッセウスは，真っ先に家族の許へ駆けつけ,何十年ぶりの再会を喜び合おうとするであろうか？ アテーネーの言うように，他の男であればそうするに違いない．

> 普通の男が放浪の旅から帰れば，いそいそと屋敷へ帰って妻子に会おうと心せくであろう．　(13巻333行以下)

しかしオデュッセウスは，女神の扮する羊飼いからここがイタカだと明かされても,心中に沸き上がる喜びが表に現れないよう抑える．

> 今や祖国にあると知って，喜びに心は躍った．女神に向かって翼ある言葉を語りかけたが，例のごとくに知略を胸中にめぐらしつつ，出かかった言葉を抑えて，真実を語らずに云々．　(13巻250行以下)

そして嘘の身の上話をして自分の正体を偽ろうとするし，不審がられるのを恐れてか,家族についていろいろ聞き出そうとすることもしない．アテーネーは，こういう主人公を評して次のように言う．

> おまえは注意深く，抜け目なく，思慮のある男[5]．　(13巻332行以下)

主人公は，あれほど再会を待ち望んでいたはずの妻に対して，しかも母アンティクレイアの霊から，その変わりのない愛情を聞かされていたにもかかわらず，さらに女神からもそれを裏づける教示を得たにもかかわらず，自分で確かめるまでは決して彼女に心を許さない．

> そなたは自ら己の妻の心を試すまでは，何も知りたいとも質ねたいとも思わぬのだな．ただし，そなたの妻は相変わらず屋敷に在って，苦

しみの日夜を涙の内に過しているのじゃぞ．　　(13巻336行以下)

そして本宅から離れて住んでいるラエルテスは別にして，ペネロペが真実を知らされるのは，テレマコスに対してはもちろんのこと，豚飼いたちよりも後回しにされることになる．乳母エウリュクレイアの認知は偶然によるが，とにかく彼女に対しても遅れを取るのである．

近代ギリシアに伝わっている類型の帰国者物語で，夫が妻に正体を明かす前に，われわれから見ると必要の度を越えていると思われる位の，一種意地悪なしつこさで妻を試す話がある．これの源流の物語が『オデュッセイア』とは別のものであるか，もしそうだとしてそれが『オデュッセイア』にも影響を与えているかどうか，判断する決め手に欠ける．しかしいずれにしても,『オデュッセイア』前半部分で「純愛物語」的傾向がことさら強調される一方，後半部分では主人公が妻を決して初めから信用せず，用心して行動するという形で，一見相対立する趣向を組み合わせた構成が取られている点に，この作品の独自の特徴が見いだされることは確かであろう．

ここで，主人公がオデュッセウスである点に注目すべきである．原型の物語における帰国者と，トロヤ戦争の英雄とは，本来関係はなかったであろう．しかし両者が結び付けられることによって民話の主人公は，『イリアス』でも見いだされる，狡知・用心深さ・計算高さなどのオデュッセウス的特徴を取り込むにいたった．あるいは，帰国者が復讐においてその種の性質を既にある程度発揮していたとしたら，それがオデュッセウスの帰国譚においては，妻に対する態度に関してまで拡大適用されている．オデュッセウスは，ナイーヴな「純愛物語」的帰国者譚には必ずしも適合するとはいえない，ソフィスティケートされた人物である．ここには，主題と主役との間の一種の不調和が認められる．

この不調和に対応するのが，物語の旗振り役としてのアテーネーの言動である．女神の助言・命令は，特に作品後半部の展開において大きな役割を果たしている．ペネロペに対して主人公が取るべき態度についても，アテーネーは指図を忘れない．女神は，主人公の妻に関して互いに食い違う話をした元人間たるアンティクレイア及びアガメムノンより高い次元に居るはずだから，妻の心中に関して全てを見通しているはずである．ところが女神は一方では，ペネロペが夫の帰りを待ち侘びつつ求婚者たちを何とかだまし続けている，彼女は日々泣き暮らして過ごしている(13巻379行以下)と主人公に教えながら,他方では，帰国したことを男女を問わず誰にも知られてはならぬ(13巻308行以下)と指図を下し，

実際に彼を年老いた乞食に変身させて，妻にも息子にも正体が分からないようにするのである．

確かにこの用心策の対象には，当初は息子も含まれるのであるが，テレマコスに対しては女神は主人公にあっさりと正体を明かさせるのに(16巻168行)，妻に対してはなかなかそうさせない．１９巻で乳母エウリュクレイアが主人公の脚の古傷に気付き，ペネロペに知らせようとする，ところがアテーネーはその時彼女の注意を逸らさせ，夫妻の間の認知を阻む，というのがその端的な例である．

> (乳母は)懐かしの夫が家にいることを妃に知らせようとして，ペネロペイアの方に目を向けた．しかし妃は乳母の方を見返すことも，乳母の眼に気付くこともできなかった．アテナイエが妃の心を外にそらされたからであった．　(19巻478行以下)

この違いを，テレマコスによる認知のときは他に誰もいなかった — エウマイオスの小屋に二人だけが残った — が，足洗いの場面では夫妻以外に多くの人が居合わせていたという，状況の相違から自然に生じたものであると説明するのは，余り説得力があるとは思えない．父子の認知を起こさせるため，他の者をすべて好都合に外出させるという，便宜手段とも呼べる方法を作者が自分に許したのであれば，夫妻の間のそれも，もし必要であれば，生じ得る状況を設定したであろう（17巻561行以下，特に584行「お一人であの男とお話し合いがなされる」参照）．

アテーネーの言動の矛盾は，アンティクレイアの情報とアガメムノンの警告との内容的食い違い，あるいは作品前半部と後半部との傾向的対立，ないしは主役と主題との間の不調和を想起させる．では女神は，夫を恋い慕うペネロペの気持ちを見通しているにもかかわらず，なぜ復讐計画においては彼女をつんぼ桟敷に置こうとするのだろうか？

それは，アイスキュロスの『オレステイア』でも男性サイドの発言をすることで知られる女神の，女性への不信感に基づいているであろう．アテーネーはテレマコスに名を挙げさせるためスパルタに旅をさせたが，その彼を呼び戻そうとして傍らに現れ，帰国を促す．その言葉の中で女神は，ペネロペに関連して，女の心は当てにならない，女は自分の嫁いだ男の家を富ませることだけに関心があるのであり，死んだ前の夫や，その間に出来た子供のことは忘れてしまって，屋敷の財産を持ち出す振舞に出るかもしれないと語る(15巻19行以下)．女

性は自分の現在の夫とその家に受動的に服従して，その利害を第一に考えるものだ，というのが女神の猜疑するところである．言い換えれば，女性の一途に変わらない純情を信じないわけである．言うまでもなく，女神のこういう思考法は，ギリシア男性一般のそれを反映している．女性不信がギリシア文明に古くから根付いていることは，初めて人類に災いをもたらした最初の女性パンドラの神話の一例をもってしても明らかである．

女神の警告は，ペネロペがオデュッセウスの家を去って，別の男のところへ行くという場合を考慮にいれて言われているのであるが，この可能性はいま現実になり得る状況下にある．すなわちオデュッセウスは，トロヤに赴く前に，息子が髯の生える頃になっても自分が戻ってこなかったら，ほかの男に嫁いでよいと妻に言い残していた上に，テレマコスも最近，求婚者たちが財産を勝手に費やしていくのに苛立ちをつのらせ，家を出ていって欲しいと彼女に求めるようになっているのである(18巻269行以下,19巻532行以下).オデュッセウスがここにいることをさっさと打ち明ければ，彼女が再婚して屋敷の財産を持ち出すことも自ずと防げるわけであるのに，それはしようとはしない．ペネロペを万事休すの状況に追い詰めておきながら，彼女が家を去る ― それも夫や息子の意向に沿って,不承不承(19巻581行など参照)そうするのであるのに ― ということは裏切りと捉えようとする．ここには男の身勝手さが働いているようである．

人から聞くよりも,自ら確認することにこだわる(13巻335行以下)のがその性質だとアテーネーに評された主人公が，妻にわが目で会い，親しく言葉を交わした後に取る態度はどのようなものか．

オデュッセウスが自らペネロペの様子を観察することの出来る最初の機会は，１８巻で彼女が求婚者たちの前に姿を現す場面で与えられる．ここで彼女は，再婚は不可避としても自分にとっては疎ましい，といった言葉を発するが(18巻272行以下),これは求婚者たちその他を前にして言っているので，彼女の真情を即座に証明するとは言えないかもしれない．従ってオデュッセウスが，この段階でまだ彼女を信じ切るに至らないのは，一応根拠があるといえる．彼はその後１９巻で，もっと彼女の心をいたぶって試すつもりだと息子に告げ(19巻45行)，自分自身に関する嘘話をして，それでなくとも沈んでいる妻を一層悲しませる所業に出る．

この対話(19巻103行以下)において彼は,アガメムノンの霊も保証していたように，ペネロペが自分を殺そうとまではしないだろうということは，確信できたはずである．しかしそれでもなお彼は，自分自身に関する作り話を聞く妻が涙に暮

れるのを目の前にみて哀れに思いながらも，自分を彼女に明かそうとはしない(19巻209行以下)．この時点においてなお彼が妻に心を許さないのは,足洗いの時に相手がオデュッセウスだと気が付いて叫びそうになった乳母エウリュクレイアを抑止した時に主人公が見せた，怠りない警戒心と同類の理由に基づくのであろう．乳母の愛情が，彼の幼少のときと変わらずに続いていることをオデュッセウスは，彼女の言葉のはしばしから理解できたはずである．ペネロペやエウリュクレイアにあくまで秘密を打ち明けないのは，感情に動かされやすい女性の弱さが,計画を頓挫せしめるかもしれないという用心に由来すると思われる．オデュッセウスは実は，妻との愛の交わりを久方ぶりに果たした後も，彼女をこの観点から完全には信用していないのである(23巻361行以下)．

オデュッセウスおよびその子が，復讐に女性が参与することを全く認めないのには，まだ他にも理由がある．弓競技の場面でペネロペが，オデュッセウスの扮する乞食にもやらせるべきだ,と口を出したのを制してテレマコスは,弓矢は男の管掌に属することであり，特にこの家を治める自分の領分だと言って，彼女に部屋へ行くよう指示する(21巻350行以下).オデュッセウスの愛弓が欠くべからざる役割を果たす復讐の最中，ペネロペは部屋で（オデュッセウスらの考え方を共有する）アテーネーのせいで眠り込んでいるし，エウリュクレイアを含む他の女性たちは全て，扉を鎖ざして閉じこもり，物音や呻き声が聞こえても決して出て来ずに,女の仕事をしているよう言いつけられる(21巻382行以下)．これは，女性が戦闘において非力であり，足手まといになるということに基づいていることは間違いないが，また武勇という「男の領分」における父子の誇りと，その点に由来する女性への軽視の気持ちも係わっていると考えられる．

さて,男同士の戦いにおいてオデュッセウス父子は,アテーネーの助けもあって，なんとか勝利を収めるが，その緒戦において極めて重要な働きをしたのがオデュッセウスの弓である．わずか４人のこちら側に対して相手は１００人以上ということになっているから，この彼の強弓は飛び道具を持たない敵の戦力を削いで，少しでも有利な状態に近づけるのに欠かせない武器であったわけである．ところで，この弓を主人公が手に入れることができたのはペネロペのお陰であった．彼女はオデュッセウスが帰っているとは知らないまま，新しい夫を選ぶため弓競技を催すと決めたのである．彼女がこれを言い出すきっかけは，なにか取ってつけたような，唐突な印象を与える．弓競技の趣向は原帰国者物語に遡ると考えられる．そこにおいては，よそ者が夫であることをすでに知っている妻が，彼と共謀してこの競技を提案したという筋書になっていた可能性

がある．いずれにしても，夫妻間の認知とは全く無関係に終わる『オデュッセイア』の場合と異なり，そこではそれは疑いなく，二人の愛情の最確認と切り離せない要素になっていた．『オデュッセイア』においてはこの要素は，その提示の仕方が唐突であるだけに，原帰国者物語を聴衆に一際強く意識させることになり，夫の愛弓を通じて夫妻の愛情の物語が改めて想い起こされる効果を有している．ところがオデュッセウスらが，「男の領分」を重んじ，妻の口出しを拒むことにより，一旦想起させた原型物語の「純愛」的雰囲気は打ち壊される．しかし若しペネロペが，どういう意図のもとであれ，弓に近づく機会を与えていなければ，彼らの勝機は少なかったはずである．

それはともかく，オデュッセウスの弓矢は，引き絞る大力と，的を射通す絶妙なテクニックとをともに要する点で，彼が非の打ち所のない万能的勇者であることを証明する機会を与える．

男同士の戦いを終えたのち，主人公は２３巻に至って初めて妻に自分を明かし，夫であることを認めさせようとする．しかしながら，夫が帰ってきたと告げる乳母の言葉を彼女は信じようとしない(10行以下)．下に降りてきた彼女は,オデュッセウスと向かい合って座るが，ためつすがめつ彼を眺めても相手が夫だとは思えず，声を掛けようともしない．テレマコスがそんな彼女を非難すると，ペネロペは自分の心が戸惑っていることを明かし，彼が本当にオデュッセウスであるかどうか確かめる良い方法があるから，すなわち夫と自分しか知らないある秘密の印があるから，それに訴える意向であると告げる．それを聞いてオデュッセウスはわけ知り顔に微笑み，息子に向かって，ペネロペに自分を好きなだけ試させるがよい，良く分かるようになるだろうと，余裕たっぷりの言葉で語る．そしてその前に，求婚者たちの殺害の後の処理をどのようにすべきか考えねばならぬと諭す．すると息子は，比類のない知謀をうたわれる父の指図に従うと答える(88行以下)．

いま触れた，妻による夫の試しそのものの直前の個所で，夫，息子および妻が三人とも「賢い」ないし「思慮・用心深い」と呼ばれている点が目に付く．すなわちペネロペに対してはπερίφρων(104行)，テレマコスに対してはπεπνυμένος(123行)，オデュッセウスに対してはπολύμητις(129行;124行以下参照)という形容句が与えられる.もちろん本作品のあちこちで三人のそれぞれがそのように言われるが,ここではこれらの言葉が近距離で,お互いに突き合わせるように用いられていることに注目すべきである．テレマコスが「賢い」と称されるのは，専らオデュッセウスの子であるからであろう．した

がって，対決するように相対して座り，試しが行われようとするこの場面では，夫と妻との知恵の比較が行われようとしていると解することができる．二人はもう一つの点でも比べられようとしている．すなわち両者とも，やはりテキスト上近い距離で，「忍耐強い」と呼ばれるのである(100行および111行)．

求婚者たちとの戦いでは，領主としての地位ないし男の名誉と，肉体的生命とが争いの対象であった．いま主人公は，妻による試しを克服し，夫と認めてもらえるか，という試練に直面する．妻との再会こそ彼にとって，数々の肉体的苦難を耐えさせてきた生存目的を意味していたのである．

さてオデュッセウスは湯浴みをして体を清め，きれいな服をまとった(23巻153行以下)．アテーネーが手を貸して，彼が一層美しく見えるよう体格を大きくし，髪を魅力的に整える．類似の場面で乙女ナウシカアは，見違えるほど立派になった主人公を見て，彼のような夫を持ちたいものと願った(6巻244行)．しかしペネロペはそういう彼を見てもやはり軟化する様子を見せず，主人公から頑なな心を責められる．ここで彼女は，そうと悟られないようにして，先ほど口にしていた試しを行う．夫婦のベッドの秘密を通じてオデュッセウスはまんまと鎌を掛けられ，妻が裏切ったと思って激怒する．これによりペネロペは，やっと彼がオデュッセウスであることを認め，身を投げかける．

オデュッセウスが，生涯を通じて知恵によって負かされた相手は，パラメデスの他には，わが妻だけであろう．さらに，年寄りの乞食としてではなく，若若しく美しくなって目の前に現れた，２０年間待ち続けた夫を見ても決してすぐには抱きつかず — そうしたいのはやまやまであったろうが(23巻87行参照) — ，確かな印によって確認するまで自己を抑えるペネロペは，彼のもう一つの長所たる忍耐強さないし克己という点でも，夫に勝るとも劣らないといえる．

オデュッセウスとペネロペは，ベッドの上で，互いのこれまでの自分たちの苦難の数々を語り合う．それは本作品の内容の大略に他ならない．再結合を果たした主人公とその妻による，彼ら自身の物語の要約は，作品出だしの主題提示と対応する．

しかし作者は，オデュッセウスのこの「ロマンティック」な物語につきまとうアイロニカルな側面を，結末に向け改めて聴衆に意識させる．

直後に続く第２ネキュイアでは，人間界の事件が高い次元から批評されると言える．ヘルメスにより冥界に連れられてきた求婚者たちの魂から話を聞いたアガメムノンは，オデュッセウスを至福と称える．その時彼の霊はアキレウスの亡霊と対話しており，戦場で華々しい戦いののち倒れ，誉れある葬儀を受け

ることの出来たこの英雄の幸せと名誉を称えたばかりのところであった．至福という点においてアキレウスと並べられるオデュッセウスがそう判断されるのは，求婚者たちの殺害その他の勇士としての働きの故ではなく，むしろペネロペという妻を持つがためである．

> オデュッセウスよ，そなたは仕合わせな男じゃ，実に見事な婦徳を具えた妻を，そなたは持ったものな．イカリオスの娘，非の打ちようもないペネロペイアの心ばえの，何と優れていたことか．また何と誠実に，嫁いだ夫オデュッセウスのことを忘れずにおったことであろう．
>
> (24巻192行以下)

この時求婚者アンピメドンは，オデュッセウスが自分たちへの復讐において妻と協力した，と語る．

> (ｵﾃﾞｭｯｾｳｽは)狡知を働かせて，自分の妻に命じ，われら悲運の求婚者らに技を競わせ，殺害の緒としようとて，彼の弓と灰色の鉄の斧とを，われらの前に置かせたのだ．　(24巻167行以下)

彼の正体が，妻には復讐前から明かされていたということを意味する．これは事実とは相違するが，オデュッセウスが復讐計画において取り得たベストの方法と考えられるものを，第三者的・客観的視点から表したものと言える．ペネロペは，知恵の豊かさないし用心深さにおいて，また忍耐強さにおいて，夫に決して引けを取らないことが証明された．その彼女に自分を早くから明かし，有力な協力者にすることこそ，復讐の成就をもたらす最も確実な方法であったことであろう．これは正に，「ナイーヴ」な原帰国者物語で取られていたかもしれない方法である．オデュッセウスが実際に用いたやり方においては，重要な勝機をもたらした彼の弓は，ペネロペの思いつきによりかろうじて彼の手に渡ったものであり，一種の偶然的要素を免れていないのである．

夫婦間の心的・気質的一致こそ神々の最高の恵みであると，人生経験豊かな主人公は乙女ナウシカアに説いた．

> 背の君とお屋敷と全き和合を悉く神々があなたにお授けになりますように．実際，夫と妻が心を通わせながら家庭を営むことに優って望ま

しく結構なことはありません.(途中略)そのことは本人に一番良く判ることです.　(6巻180行以下)

彼「本人」は，正にその故に自分を称えてしかるべき資格を有していたにもかかわらず，それを認めなかった，あるいは信じきることができなかったことの皮肉性が，第三者によるこれらの発言を通じて明らかにされるのである.

この作品の前半部分において，「純愛物語」的な傾向が強調されているのは，多かれ少なかれナイーヴであったと推察される原帰国者譚の基本的性格に対応していると聴衆は受け取ったであろうが，他方では，主人公がそのような話とは必ずしも調和するとは言えない人物であるので，彼らの心中には何かそぐわない，納得のいかない感じが残ったと思われる．作品後半部，いよいよ本題に入ってから，主人公がそれまでの調子とは大きく異なる態度・行動様式を見せ始めると聴衆は，それこそ本当だと頷いたかもしれない．民話の，古き良き時代と，彼らの時代との気風的相違は，アテーネーの言動の矛盾によっても反映されている．ギリシア男性の女性に対する「現代的」考え方は，女神の女性不信と相通じている．そして，女神の指示に従って行動するオデュッセウスは，ギリシア男性一般を代表する．女性を疎隔し除外しながら，復讐は男たちだけにより進められ実行される．『イリアス』的な対求婚者の戦いにおいて主人公は，トロヤ戦の勇士たる自分の力を発揮し，見事勝利を収める．ところがその後に続く，自分の精神的命の掛かった場面において彼は，妻を説き伏せるどころか，むしろ彼女による試しにおいて知恵により負かされる．また忍耐・克己力においても，妻は彼に勝るとも劣らないことが示された．そして冥界において，人間界の事件を総括するように,主人公は勇士としてよりもむしろ,良き妻をもったがゆえに至福と称される．千年ほど後に作られたロマンスのほうが，女性の読者を主に対象としているということもあってか，原帰国者譚に見られる純朴な愛情物語に近い傾向を示している.『オデュッセイア』 の世界では，そのような純愛物語を信じ，それに没入できるような素朴さはすでに失なわれている[6].しかしオデュッセウスは,それを信じてもよかったのではないか？ それを信じられなかった彼は,一種滑稽な骨折り損を得たのではないか？ さらに，男たちが自ら誇りとする特性は，果たして男だけしか持ち得ないものであるのか？ 男性たる作者は，このようなことを聴衆の男たちに,いわば皮肉な微笑を浮かべながら，語り掛けたのである.

注

(1)　『オデュッセイア』および『イリアス』からの引用に際しては,一個所を除き，松平千秋訳を用いる．

(2)　英語圏ではこれらの作品をｎｏｖｅｌと呼ぶのが一般的のようだが,やはりロマンスの呼称のほうがその作風にふさわしいであろう．

(3)　松本仁助,『オデュッセイア』研究，東京　１９８６年,１４８頁以下参照．

(4)　根本英世，「オデュッセイアにおけるナウシカアー」,『西洋古典学研究』XXVI，東京　１９７８年，２３頁以下参照．

(5)　ここは筆者の訳である．

(6)　岡道男，ホメロスにおける伝統の継承と創造,東京　１９８８年,８４頁参照．